大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査(1)　―今峠遺跡―

橘　　昌信

1　はじめに

九州における旧石器時代の研究は西九州においていち早く本格的な調査が開始され、数多くの成果を上げ模範的な地域として、基本的な体系が組みたてられつゝあると言えよう。これに対して東九州における研究は緒に就いたばかりであるが、その中にあって、大野川流域は有望な地域と目され、二・三の発掘調査が実施されると共に表面採集によって多数の石器類が以前から発見されている。特に大野郡大野町を中心とする地域は旧石器時代の遺跡が集中しており、それらの基礎調査として、大野町に所在する製紙工場前遺跡、小牧遺跡、それに今回報告を行う今峠遺跡の試掘を実施したのである。

今峠遺跡は昭和１０年、大野高校生徒である綿貫俊一・安藤栄治の両君によって発見され好資料が得られている。数回にわたる表採資料の検討と今峠遺跡を含めた周辺の踏査を重ねた結果、５２年１１月に表採資料の出土層位確認と地層の堆積状況観察を目的とした基礎調査を実施したのである。

2　遺跡の立地と環境

祖母、傾、阿蘇外輪山それぞれに源を発する大野川は県下最大の河川で、荻町・竹田市の上流域、緒方町・三重町・大野町の中流域、それに大分市の下流域を抜けて別府湾に注いでいる。大野川中流域の北側を形成している大野町は、２００～３００ｍの標高を有する凝灰岩の台地が開け、「大野原台地」と呼称されている。この台地はほゞ６Km²の広さで、各所は開析が進み複雑な地形を呈しており、台地上には旧石器時代をはじめとして縄文・弥生時代の諸遺跡が集中している。

今峠遺跡は大分県大野郡大野町大字田代字今峠所在し大野原台地のほゞ中央に位置しているが、他の台地と同様周囲は侵蝕によって小谷が形成され、西側および北側は特に谷が迫っている。標高は２３８ｍでほゞ平担な面を形成しているが、土層の堆積状況からすると地表面に起伏のあった事が明らかであり、実際、当遺跡を含めた周辺の台地は農業基盤事業が実施され削平、攪乱を受けている。

大野川流域の代表的な旧石器時代の遺跡として周知されている大塚遺跡とは西側の谷を挟んで対峙しており、また東南約1.7Kmには宮地前遺跡が位置している。この二ケ所以外にも周辺において旧石器時代の遺跡が確認されている。（第１図）

3　遺跡と土層の堆積

今峠遺跡の遺物の散布状態はかなり広い範囲が推定されるが、特に台地が狭少になった西側に集中する傾向が認められ、この５０×６０ｍ程の限定された地域に平均１ｍ²のピットを１２個設定して試掘を実施した。

地表面は地点によって耕作土の変化が窺え削平されていることが明らかである。すなわち遺物の集中する範囲と想定されるほゞ中央では東南から南西に向って、黄褐色の耕作土が幅約２０ｍで帯状に延びており、周囲の耕作土が黒褐色を呈しているため一見して区別されるのである。そこで地

表面の削平がほとんど受けていないと考えられる周辺部について基本層序観察することにした。

Ⅰ層　黒褐色を呈するさらさらした耕作土層で２０cm前後の厚さである。Ⅱ層　土質・色調はⅠ層と基本的に同じであるが、やゝ固く上部に橙色をしたパミス（第１オレンチ）がブロック状ないし黒褐色に混在した形で認められる。厚さは１５～２５cmである。Ⅲ層　黒色～漆黒色をした土層でⅡ層よりやゝ固く、厚さは１０cm前後である。Ⅱ層・Ⅲ層はすべてのピットにおいて認められるのではなく、南よりのやゝ高い個所において顕著である。Ⅳ層　上部は黒色味が強く下部につれて黒色が弱まり、逆に褐色～黄褐色味を強く帯びてくる。Ⅴ層への漸移層と考えられ、厚さは１５cm内外である。Ⅴ層　上面は明瞭に把握できずⅣ層との境界は波状を呈している。色調は明るい黄褐色で、粘質は強くなくむしろ軟らかである。厚さは３０cm前後である。Ⅵ層　Ⅴ層に比較すると固さを増し、色調も幾分暗く全体的に褐色がかかっている。厚さは２０～３０cmであるが、上・下の層との境界は明確さを欠いており、波状を呈する個所も見られる。Ⅶ層　暗褐色～黒褐色の極めて固い層で、他の土層とは明らかに区別でき黒色帯（ＢＢ）として把握される。厚さは１５～２５cmを測ることができる。Ⅷ層　三ケ所のピットにおいて確認できた層であり、軟質で明るい黄褐色を呈している。厚さは８０～９０cmにも及ぶ堆積がみられる。Ⅸ層　一ケ所のピットの最下底面において上部を確認に出来た層であり、黄白色で粒子の粗いパミスと考えられる土層で、「マメンコ」と通称されているものに対比される。

一方、遺跡の中央部ではやゝ黒味を有する黄褐色の耕作土があり、上部の１０～１５cmは非常に軟らかく、下部は固さにおいてやゝ異なる。先の基本層序に対比させると上部は色調が違うがⅠ層になり、下部はその下位の黄褐色土層を考慮すればⅣ層にあてることができる。Ⅴ層は軟質な黄褐色土層であり、この層の一部は削平を受け、それより上位の黒褐色の土壌と攪乱を受けⅠ層・Ⅳ層を形成しているものと見なされる。Ⅵ層は褐色土層で、下部に従がって黒味を増し、同時に粘質の強い固い層へと漸次移行しており、Ⅶ層の黒褐色土層との境界は明瞭にし得ない。Ⅷ層は黄褐色土層となっている。一ケ所のピットでは表面にⅦ層が露出し、その上部が耕作土となっており、台地の起伏と削平のあり方の一端が示唆されている。（第２図）

４　遺物の包含層と出土状況

今回の試掘で出土した石器類の数は２７点と少なく、それに表面採集で得ている定型化した石器が階無のため初期の目的の全てが好条件で達成された訳ではないが、一応の成果を収めることができた。

試掘で得た資料のうち、プライマリーな状態と判断される遺物は五ケ所のピットから１７点出土している。すなわち基本層序のⅤ層とした黄褐色土層中およびⅥ層の褐色土層の上面においてであり、Ⅵ層上面より下位の各層からは１点の遺物も出土していない。出土資料の数が極めて限られているものゝ、当遺跡における包含層はⅤ層上部からⅥ層上面にかけてと把握される。たゞ五ケ所のピットにおける出土状態と土層の全体的な堆積状況を加味して考察すると、Ⅴ層下部からⅥ層上面において遺物の出土しているピットでは上部の二次的な削平・攪乱がほとんど行なわれていないと判断される地点であり、一方Ⅴ層の上部から中部にかけて遺物の発見される個所ではⅠ層から直接Ⅳ層となり、しかもⅤ層上部が削平を受け、上位の土と攪乱されていると考えられるのである。この事からⅤ層の上部において認められる遺物は、

もともとV層の中での上部において存在するのではなく、V層中のより深い地層での出土と把握すべきものと推察されよう。結局、今峠遺跡における遺物包含状況はV層の中部、あるいはV層下半部からVI層の上面にかけてと判断されよう。

次に当遺跡が営なまれた時期、すなわち石器群がある限られた単一のものか、それとも複数の時期なのかについてが当然問題視されるであろう。これについて明確に論じる積極的な資料を用ち合わせていないが、遺物が包含されている土層の厚さの幅（垂直分布）が30cmにも満たなく、それにVI層上面より以下のいずれの層においても1点の出土遺物がない事から当遺跡における石器類を単一の時期の所産と考え、一つの石器群と判断されよう。

5　資　料

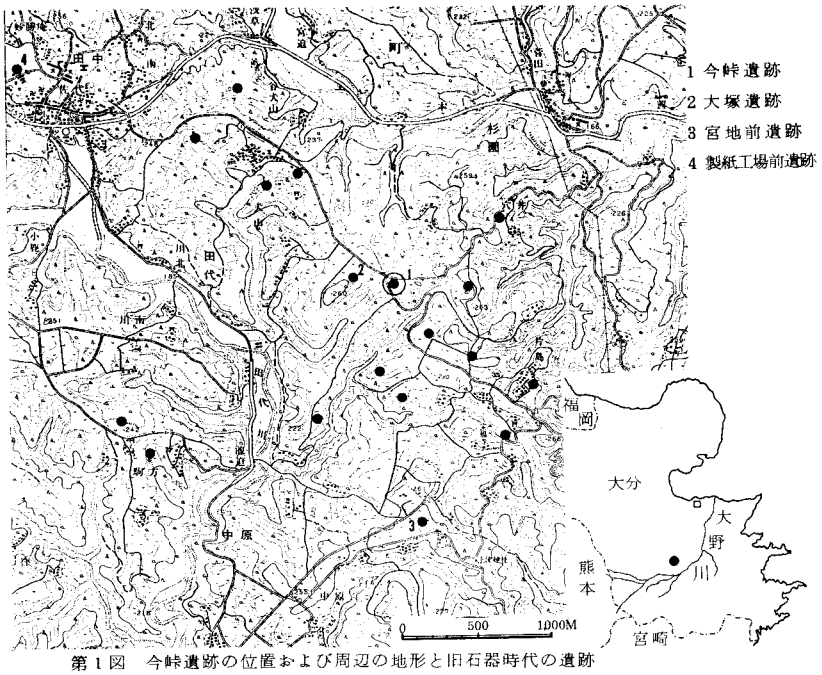
採集資料　今峠遺跡における綿貫・安藤両君の手による表採および試掘時での採集資料の総数は石器・剥片・石核などを全て含めるとかなりの数にのぼり、石器のみでも40点を越えている。ナイフ形石器をはじめとして、台形状石器、尖頭状石器、掻器・削器などに大別され、他に剥片の側辺の一部に二次加工が施されているものや、使用痕と考えられる小剥離が観察されるものなどが認められる。石器類の大半は無斑晶流紋岩で占められ、表面の色調が黒っぽいものと淡黄灰色のものとがみられる。他にはチャアート、硅質岩などが若干用いられているが、黒耀石は全く使用されていない。

ナイフ形石器（1～10）ほゞ縦に長い剥片が素材に用いられている点で共通するが、大きさおよび二次加工のあり方から三大別されるであろう。1～3は素材とされた剥片の形を復元するのが困難なほどに背および基部に丹念なトリミングが施された幾何学的な小形のナイフ形石器である（Ⅰ類）。4はこの一点のみであり、素材を截断して背部と基部を形成している点は先の三点と全く同様であるが、大きさにおいて二倍近くある事から一応区別した（Ⅱ類）。5～10は剥片の打面側をナイフ形石器の基部としており、この周辺ないし側辺の一部にブランティングが施され、剥片の形態が比較的残されている（Ⅲ類）。5は側辺から先端にかけて、鋭利な尖頭部を意図した二次加工が明瞭に看取される。6～8は基部から側辺の一部にかけてゞあり、9・10は打面の周辺のみ主要剥離面側からの加工が施されている。6～10はいずれも剥片の打面と反対の一端が尖る剥片を素材に選択している事が窺え、5のみは剥片の一端が尖っていなかったのであろう。図示しなかったが、破損品の中にⅢ類と同様なものが数点認められる。

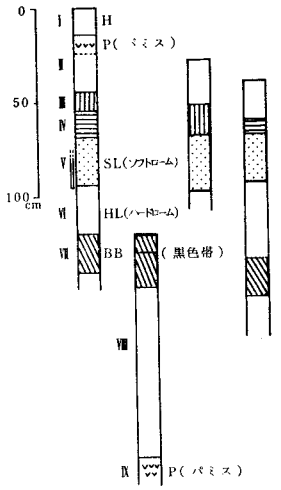
台形様石器（11～13）台形に近い形を呈する小形の石器を他と区別したが、3点とも素材に対する加工のあり方がそれぞれ異なっている。11はやゝ横に長い剥片の打面と逆の一端に両面からの二次加工が施されており、12は横長剥片の一側辺にのみ主要剥離面の方向から行なわれている。13は横長と考えられる剥片の両側辺の一部が台形状に大きくカットされ、その後断面に小さな調整が加えられている。百花台型や枝去木型とも異なっており、台形様石器としてはかなり退化したものと予想されよう。

尖頭状石器（14～16）比較的大形で厚味のある「ノ」の字形の剥片を素材に用い、打面の周辺に集中して全体的に粗い二次加工が施されている。打面と反対の鋭利な一端が功みに利用されている特長的な石器と言えよう。（第3図）

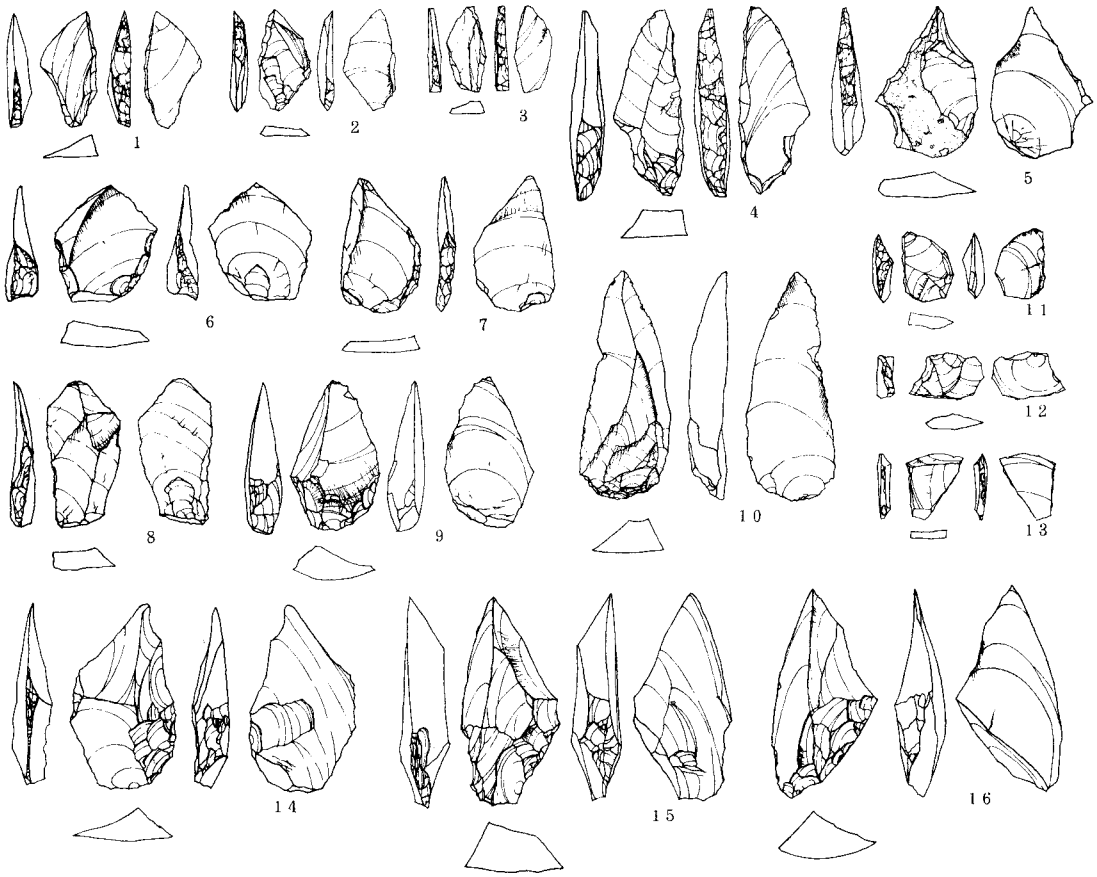
掻器・削器（17・18）図示したもの以外にも採集されているが、17はそれらの中で最も典型的なもので、大形で厚味を有する縦に長い剥



第1図　今峠遺跡の位置および周辺の地形と旧石器時代の遺跡



第2図　今峠遺跡上層模式柱状図



第3図　今峠遺跡採集資料

（縮尺 $\frac{1}{2}$）

第４図　今峠遺跡採集資料および発掘資料　（縮尺$\frac{1}{2}$）

片を素材に用い、平担で大きな打面以外の周辺に沿って丹念な二次加工が行なわれ刃部を形成している。１８は縦長の厚味のある剥片の一側辺に主要剥面側からの小さな剥離が並んでいる。

彫器　（１９）玉髄と推定される礫のほゞ三面を大きく剥離した厚手の素材に、その一端に打面を形成して２回の樋状剥離が施されている。

剥片　（２０～２２）相当数採集されており、比較的縦に長いもの（Ⅰ類）やゝずんぐりした縦長で打面と逆の一端が尖り片方に寄っている「ノ」の字形のもの（Ⅱ類）、それに横長のもの（Ⅲ類）と三大別される。これらの剥片の大半は１回～数回の大きな剥離による平担打面で、しかも比較的大きく、打面と主要剥離面のなす角度は110°～120°におさまっている。また大剥離面には打面の方向とは逆の方向や横方向からの大きな剥離面を残すものが認められる。２０はⅡ類で、一側辺に素材である流紋岩の表皮を残している。２１はⅢ類の小形の剥片であり、２２はⅠ類の標準的なものとされよう。

石核　（２３・２４）４点ほど採集されており２３は小形で細石核を推測させるが蛋白石と思われる石材に起因するためか、周辺の調整加工および一端のフルウティングの面が顕著でなく速断しかねる資料である。２４は流紋岩の挙大の円礫を素材に用いており、剥片剥離作業は主として上端からしかもそのほゞ一面に行なわれている。末端からの大小の剥離面が残されているが、これは調整のためと考えられる。打面は数回の大きな剥離によって形成されており、石核の打面と主要剥離面のなす角度は約７５°を測ることができ、先に述べた剥片の打角と符合している。また、この石核の大きさや形から推定される剥片は当遺跡におけるナイフ形石器や尖頭状石器の素材に合致するものと判断できる。（第４図）

発掘資料　今回実施した試掘ピットの６ケ所から総計２７点の資料を得たが、そのうち１７点はⅤ層からⅥ層上面にかけての包含層からの出土である。資料の絶対数が少なく、それに定型化された特長的な石器がないが、掻器・削器や局部的な二次加工ないし使用痕と推定される剥片が若干出土しており、これらは他の剥片を含めて表採資料との対比が可能な資料として重要視される。

掻器・削器　（２５・２６）２５は流紋岩の縦長剥片の一側辺に二次加工を施して刃部を形成しており、打面の周辺にも大小の剥離が見られる。２６は厚味のある剥片の一側辺に大剥離面側からの粗雑な二次加工が行なわれている。２５はⅢ層、２６はⅤ層下面から出土している。

剥片　（２７～３４）２７・２８はほそ長い小形の剥片で細石刃を彷彿させる。２９も同様に小さな剥片で大剥離面中央に稜を有し、その左右には調整のためと考えられる剥離が施されている。３０～３３は縦に長い剥片で、大剥離面は横あるいは打面とは逆の方向からの剥離面によって形成されている。打面は平担打面でその打角は115°前後に集中している。３４は大形の剥片であり大剥離面は周辺からの放射状の大きな剥離面が残されており、この剥片が石核から剥離される以前の調整剥離である。２７～３４はいずれも包含層からの出土資料である。

試掘の資料にはナイフ形石器や尖頭状石器などの出土がなかったが、Ⅴ層からⅥ層上面にかけて出土した剥片を主とする資料は、表採されている石器の素材や剥片の諸特徴と符合するものと判断でき、遺物および出土状態から今峠遺跡の資料は一群の石器文化の所産と把握して大過ないものと考える。（第４図）

６　おわりに

以上が今峠遺跡の試掘結果と採集および発掘し

た主要な石器類のすべてゞある。

大野川流域における他の旧石器時代遺跡との関連や対比など総括的な結論については、これまでに実施した大野町の製紙工場前遺跡および現在継続中の小牧遺跡の調査や周辺遺跡の調査を踏まえた上で論じることにして、こゝでは今峠遺跡の要点を挙げ、その位置づけの予察を行なってまとめに替えたい。

①表採および発掘資料は出土状態と石器類の遺物に観察される諸特徴から一括資料として把握でき、ある限られた一時期における石器群として考えられる。

②石材の大半は無斑晶流紋岩で占められ、他の石材は僅少でありしかも黒耀石が全く使用されていない。

③石器の組成で主要な位置を占めるナイフ形石器は小形で幾何学的なⅠ類、剥片の一部にのみ調整を施したⅢ類に代表され、同時に剥片の素材を生かした尖頭状石器も注目される。剥片は縦長のⅠ類、横長のⅡ類、それに「ノ」の字形のⅢ類が見られ、平担打面を基本し、打角は110°～120°に集中している。またⅠ～Ⅲ類の剥片を剥離した石核が出土している。

④黒耀石のナイフ形石器が主体と判断される大塚遺跡および細石核の好資料を出土している宮地前遺跡とは近距離にありながら両者とは異なっており、この事は今峠遺跡の石器群がある限定された時期での所産との考え方を示唆している。ちなみにこの三者のみの先後関係は大塚遺跡→今峠遺跡→宮地前遺跡という方向が想定される。正式な調査報告がなされていないため全く予察になってしまうが、時期的に近似する遺跡として、岩戸遺跡の第Ⅰ文化層および百枝小学校遺跡のⅢ層が考えられよう。

⑤今峠遺跡は細石刃・細石核を主体とする石器群に先行する時期が想定されるものゝ、ナイフ形石器・台形様石器など小形の石器群の存在が注目され、細石器的様相をもつ石器文化として把握されるであろう。

今回の基礎調査にあたって、大野高校の綿貫俊一君、安藤洋治君、それに別府大学の八尋実、福田一志、谷芳樹、黒田裕司、種浦修、堤安信、沢田宗順、裳方政幾君達にお世話になった。記して感謝の意を表したい。

参考文献

○芹沢長介「大分県岩戸旧石器時代遺跡の調査」考古学ジャーナル14．１９６７
○渡辺誠編「大分県大野郡宮地前遺跡発掘調査概報」　平安博物館　１９７３
○鳥養孝好・外「大野川流域における先土器時代資料Ⅰ」速見考古第４号　１９７３
○清水宗昭「九州東北部における旧石器時代の様相」大分県地方史第７７号　１９７４
○大分県教育委員会「大野原台地の遺跡」大分県大野原地区土地改良事業関係遺跡群予備調査概要Ⅱ　１９７７

脱稿後の大野川中流域の基礎調査中、今峠遺跡と対峙する大塚遺跡の台地の一部が土地改良事業による削平を受け、土層の観察がなされた。

５０㎝前後の黒褐色土層が表土で、上部の約３０㎝は耕作土化されている。次に黄褐色土層、やゝ固い褐色土層、さらに黒色味が強くて固い土層と続いており、それぞれ３０～４０㎝の厚さであるが、その境界は不明瞭である。以下は明るい黄褐色土層となっており、その上部２０㎝前後は黒味をおびている。地表面より約２９０㎝で「マメンコ」の土層となる。